

日本体育学会
体育哲学専門分科会

会報

Vol.13 (3), November, 2009

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 学会参加レポート
- ♪ 学会報告
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学専門分科会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

哲学的自立と修練
佐藤臣彦（筑波大学）

本専門分科会の名称が、2005年に「体育原理専門分科会」から「体育哲学専門分科会」に変更されて数年経ちますが、新しい名称もそれなりに浸透してきたように思われます。例えば、日本体育学会理事会においても、今や「哲学の分科会では・・・」といったやり取りが普通となり、「哲学」という用語も馴染んできています。まずは、順調な滑り出しと言えるのではないのでしょうか。

ただ、これまでも折にふれて述べてまいりましたように、「体育哲学」（や「スポーツ哲学」）が広く社会的認知を得るには、「なるほど、哲学的に見れば体育やスポーツはそのようなことだったのか」といった大方の納得が得られるよう、地道な研究成果を積み重ねていくことが不可欠です。従来、わが国で「哲学」と言えば、「なにやら訳のわからないもの」「簡単なことをわざわざ難しくするもの」といった世評があったわけですが、聞くところによりますと、フランスでは、「明晰な文章が読みたければ哲学者のものを読め」と言われているとのこと（森有正）。さすがはデカルトの国、彼我の差を感じざるを得ません。

ギリシア以来、哲学が目指してきたのは、広く「思いなし」として流布している一般通念をいま一度吟味し、見過ごされていた深層の仕組みを明らかにするところにあります。こうした営みは、現代における科学（学問）が、表層的な現象を生じせしめている深層の仕組みを「法則」として把握しようとしていることと同類です。要するに、哲学（および学問）は、「見えないものを見る」ことに本来的な役割があると言えるのです。

むろん、「見えないものを見る」という言い回しは比喩的言辞なのであって、「見えないもの」を視覚によって「見る」ことなんぞ、できない相談というものです。例えば、「質量あるものは距離の二乗に反比例して互いに引き合う」という「万有引力の法則」（ニュートン）は、空のどこを探したって見て取ることはできません。「法則の発見」は、「知性を駆使しての認識」による以外にないのです。

体育哲学やスポーツ哲学も、それが哲学である以上、体育やスポーツをめぐるさまざまな諸問題を、目に見える表面的・表層的な位相においてではなく、そうした問題を惹起せしめている深層の仕組みにおいて把握する必要があります。当然のことながら、こうした営みが容易いものであるはずはありません。哲学者のヘーゲルは、「靴を作るのだって専

門的修練が必要なことを皆知っているのに、哲学については修練しなくたって誰にでもできると思われているのは実に奇妙なことだ』（『エンチクロベディー』）と嘆いていますが、「哲学する」には、やはり専門的修練が不可欠なのです。

では、哲学における専門的修練とはどんなことなのでしょう。これはなかなか難しい問題です。本来なら「師のソクラテスと弟子のプラトン」のような「教育的関係」において修練が重ねられるべきでしょうけれども、体育哲学やスポーツ哲学のような新興分野の場合、こうした師弟関係そのものの成立が困難なのです。私の経験からすれば、まずは自ら「哲学的古典」と格闘すること以外に自己修練の道はないように思います。哲学的古典との格闘なしに「哲学すること」をなし得るとは、到底、思えません。

私も、いつのまにか還暦を（はるかに）超えてしまいました。「何をなしえたか」と自ら問うてみると、内心、忸怩たる思いを禁じ得ません。体育哲学やスポーツ哲学の行く先を思うとき、若き後継者への「精神のリレー」に思いを馳せるのですが、このリレーが成立するには、「哲学的古典との格闘」を共有することが何をおいても必要なのです。勇気をもって「哲学の森」へ分け入ろうではありませんか。苦難の果ての哲学的自立を目指して……

体育哲学考

体育哲学考—「身体運動の文化学」構築に向けて— 河野清司（中京女子大学）

スポーツにおける激しい戦いを観戦するとき、われわれはその真剣な姿に感動することがある。しかし、何らかの対象をめぐって行われる過剰な身体活動はスポーツだけの特権ではない。宗教的行事においても、激しい身体活動が展開される場面が数多くみられるからである。このようなスポーツおよび宗教的行事を含む人間の多様な身体活動をエルンスト・カッシーラーのシンボル形式という点から階層化することが可能であろう。

カッシーラーによれば、神話、言語、芸術、科学などがシンボル形式に含まれることになる。ただし、このシンボルをメタファーの意味で捉えるならば、科学の基礎である「数」の意味を理解することは不可能である。われわれが科学において数を使用する際、その背後に何らかの実体を思い浮かべることはない。虚数に代表されるように、数は科学の世界を構成する形式として機能しているだけである。つまり、シンボル形式とは、文化を構成する内的形式に他ならない。芸術にもこのような形式が存在しており、近年では、エルヴィン・パノフスキーが絵画の遠近法をシンボル形式として位置づけている。

この内的形式というシンボル理論をスポーツ研究に取り入れ、文化論として展開しているのが佐藤臣彦および高松昌宏である。現在、筆者は彼らの理論をベースにして研究を行っている。さて、スポーツの発展を構造的視点から考察する場合にも、他のシンボル形式と同様、宗教的形態（あるいは民族的形態）をその母体として考えることが可能であろう。これにより、宗教的運動形態とスポーツ的運動形態の構造上の連続性と分離性についての考察が可能になる。アレン・グートマンが明らかにしているように、原始的なスポーツには祭儀的な面がみられる。日本の神事においても木球（宝珠）を奪い合う勇壮な祭礼がみられるが、この球には宗教的意味が含まれている（「宗教的プレグナンツ」）。この宗教的行事とスポーツの違いは、意味空間の違いと身体操作性にあると考えられる。例えばサッ

カーでは、プレーの最中に「オフサイド」の判定が下されることがある（「スポーツ的プレグナンツ」）。このオフサイドによってサッカーは得点可能な領域を規定している。攻撃側選手はオフサイドにならないようにプレーすることを心がけているし、守備側はこのオフサイドを利用してオフサイド・トラップを仕掛けることが可能である。つまりオフサイドとは、サッカーやラグビーを構成しているスポーツ的意味空間であると同時に、ボールを操作する際に考慮しなければならない形式となっている点で、シンボル形式のひとつであると考えられる。現時点では、このような「空間のシンボル化」や「用具のシンボル化」に加え、「身体運動のシンボル化」という点からの研究を進めていこうと考えている。

最後に、上記のような考え方を論理的に展開していくためにも、カッシーラーの文化哲学やメルロー＝ポンティの身体論は勿論のこと、先人の体育哲学（体育原理）研究の成果を文化学構築のために再検討していく必要を切に感じている。

書籍紹介

瀬戸口明久『害虫の誕生—虫からみた日本史—』ちくま新書、2009. 林 英彰(京都教育大学)

唐突ですが、「コガネムシは金持ちだ・・・」という童謡の「コガネムシ」がチャバネゴキブリだという説が有力だという話を聞いたことがあるでしょうか。今では＜害虫＞の代表としてイメージが定着しているゴキブリですが、昭和初期の頃までは豊かさの象徴と受け止められていて、＜害虫＞の代表格となったのは高度経済成長以降のことだ、というのがこの本のプロローグです。続けて、＜害虫＞という言葉自体が日本では100年ほどの歴史しか持たず、日本の辞典が＜害虫＞という項目を載せ始めるのは、20世紀に入ってからのことだ、という指摘にハッとさせられます。

人間の生活に害を及ぼす昆虫は大昔から存在していて、定住型農耕が始まってからは、昆虫による農作物への被害が繰り返されてきたことは明らかです。8世紀の『続日本紀』にも、701年（大宝元年）に蝗（イナムシ＝現在イナゴと呼ばれている虫とは別物とのこと）による大被害に見舞われたという記述があるそうです。つまり、個別の局面において災厄をもたらす昆虫がいることについては古来から認識されていたわけですが、それらを一括して＜害虫＞と呼ぶようになったのは近代に入ってからのことである、と瀬戸口は主張します。彼は、その背景として、欧米（特に北米）において農学の一分野として応用昆虫学が成立したこと、その知見が日本に導入されて、かつては天災として受け止められていた虫の発生による被害を、人間の手による観察と操作の対象に組み込まれるようになったこと、さらに、虫害の報告が明治10年を過ぎてから急増することに注目し、近代的マスメディアの成立により、個別の局面でのみ認識されていた虫害の情報が集約され、毎年のように農作物に損害を与えていることが「発見」されたことなどの重要性を指摘します。

こういった経緯をたどって、＜害虫＞という概念が成立し、「＜害虫＞を人間の力によって排除すべき対象とみなす新しい自然観が確立した」、このような事態を瀬戸口は「＜害虫＞の誕生」と呼んでいるわけです。

そのことが社会的にどのような影響をもたらしたかという点については、『害虫の誕生』の本文をお読みいただきたいと思うのですが、今回、およそ「体育哲学」に似つかわしくない書籍を選択したのは、私が「誕生」とか「発見」といった用語にある種のこだわりを

抱えていることによります。若い頃、『監獄の誕生』(Michel Foucault)とか『精神の発見』(Bruno Snell)といった本を読んだ時にも感じたのですが、私たちにとっては、生理的・物理的意味での「誕生」や「発見」よりも、＜概念＞の「誕生」や「発見」こそが重要なのだという気がいたします。

『害虫の誕生』は、平易な文章と事例の中で、あらためて＜概念＞の誕生について考えさせてくれる本でした。

学会参加レポート

鈴木志麻(東海大学大学院)

今回、日本体育学会第60回記念大会が広島大学で行われた。私は初めての学会ということもあり期待と不安のなか広島大学に降り立った。まず、はじめに驚いたのは人の多さだった。全国から体育・スポーツの分野で研究をしている先生方、学生たちが数多くいることを改めて目の当たりにした。そんなことを考えながら緑豊かな広大なキャンパス内で迷わぬようどうにか会場に辿り着いた。

体育哲学専門分科会ではキーノートレクチャー、シンポジウム、一般研究発表11が三日間を通して行われた。

キーノートレクチャーではDavid A. Turner氏による「教育学とスポーツ哲学」、シンポジウムAでは「体育哲学における学校体育論議の検討と視界(1) 体育学校体育論の逆照射—体育はこどもたちをどうしたかったのか?—」、シンポジウムBでは「＜広島＞と身体文化：ローカリティの哲学の試み」を全体のテーマとして行われた。一般研究発表では箱根での体育哲学専門分科会夏期合宿研究会で小報告をした多くの先生方、大学院生が発表を行った。どの発表も合宿から一か月あまりの間に洗礼され、充実した研究に変化していた。

体育哲学を勉強し始めて間もない私が体育哲学を語ることなどおこがましいが、今回の学会を通じて体育哲学について思ったことを少し書きたいと思う。

学会大会を通じて、体育哲学に他の分野とは異なる魅力、楽しみを感じ始めた自分を発見した。その魅力は、普通と考えられていることに対して疑問を抱き、真理に迫ることなのかもしれない。答えが出ないことや、人によっては捉え方が違うこともあるが、それがまたおもしろい。多くの人と議論することによって今まで考え付かなかった答え、考え方を発見することができる。また、歴史という時間の流れによって物事の真理の捉え方が変化していく。答えが出ないものを私たちは研究しているのかも知れない。しかし、物事を行うにあたって真理を追究しなくては目標を見失ってしまう。それは、体育の分野においても同じである。だからこそ、体育哲学の発展は体育分野全体の発展とも言える。そんなことを、考えながら帰りの新幹線に乗って家に向かった。

今回の学会では箱根の合宿とは違った角度から発表を見ることができた。それはここまでに、体育哲学という分野で研究を行っている多くの先生方、研究生、大学院生の皆さんと論議を交わし、考えさせられたからである。来年のこの学会では、充実した発表ができるように研究に励みたい。

国際スポーツ哲学会（International Association for the Philosophy of Sport）の第37回大会が、去る8月27日（木）～30日（日）の日程で、米国・シアトルのシアトル大学で開催された。日本からの参加者は、畑 孝幸（長崎大学）・関根正美（岡山大学）・深澤浩洋（電気通信大学）・石垣健二（新潟大学）の4名であった。

学会大会の一般発表総数は55題であった。日本からは、関根・畑（「日本におけるスポーツ哲学の成立と展開」）および深澤（「スポーツにおける意味生成としての内在的価値の経験」）の発表があった。今回は、開催地がアメリカということもあり、当然のことながら北米（アメリカ・カナダ）からの発表数が多数であった。それら発表の多くはオーラルのみのプレゼンテーションであった。発表タイトル全体を見渡してみると、ドーピング問題やスポーツのあり方、そのセクシュアリティを問うような倫理的問題を扱う発表が多かった。しかし、「勝利と敗北—子どもたちに準備はあるか」「感性教育／トレーニング：現代サッカーに対する挑戦」「人格のための若年競技者へのコーチング」といった教育的観点からの発表も一定の割合であったことは、注目しておくべきだろう。また、今回の大会で特に感じたことは次のことである。「存在論そして認識論という観点からの自由時間」「空間、時間そして動作：カント的多様性を問う」など伝統的な哲学に則った研究発表がある一方で、「スポーツ、アルコールそしてよき人生」「あらゆることの尺度としての自転車」「ボックスから芸術：アヴァンギャルドとボクシング」といったタイトルが示すような非常にポップな感覚で—このような表現が適切かどうか疑わしいが—スポーツを論じようとする発表もそれなりの割合であったということである。これは、現代哲学がそのような感覚で、より複雑化した社会をとらえようとするその傾向の現れなのかもしれない。あるいは、現代スポーツがそれほど複雑化しているということをも意味しているのかもしれない。もちろん、開催地が北米でなく欧州であれば、その傾向も異なったものとなるだろうが、スポーツ哲学における問いのあり方は本当に自由なのだとあらためて感じさせられた。いずれにしても、それら発表に現代のスポーツ哲学が論点とするべき重要な問題がはらまれていることは間違いないだろう。

学会のビジネスミーティングでは、来年度の会期と開催地が報告された。来年は9月15日～19日の日程でイタリア・ローマにおいて開催される予定である。またそこでは、学会の編集部が「非英語圏のスポーツ哲学」をテーマとしてJPS誌を編集する予定であるとの報告もあった。今大会における関根・畑の発表でも中心テーマとして扱われているが、倫理的問題が中心となっている北米のスポーツ哲学に対して、日本（アジア）独自のスポーツ哲学として、どんな内容が位置づけられることになるのだろうか。それらは、伝統的な哲学に則った欧州のスポーツ哲学や、先に述べたポップな哲学とも異なり、世界のスポーツ哲学という領域に対して何をアピールすることが可能なのだろうか。イタリア・ローマ

での日本人の発表が注目されることになるだろう。

※本学会の詳細報告は、「体育・スポーツ哲学研究」に掲載される予定である。そちらも参照されたい。

運営委員会より

分科会メーリングリストへのご登録のお願い 新保 淳(静岡大学)

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性、経済性、分科会活性化の観点から、是非ともご登録をお願い申し上げます。次のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには、事務局 ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp までご一報ください。
- 2) 登録完了後、taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。
- 3) [taiikutetsugaku]グループについてのお問い合わせグループ管理者（事務局）：taiikutetsugaku-owner@yahoogroups.jp

体育哲学専門分科会のお知らせ

舛本直文(首都大学東京)

平成 21 年度第 2 回定例研究会を 2009 年 12 月 12 日(土)に下記の要領で開催いたします。なお、研究会前に同じ会場で **14 時より運営委員会**、研究会終了後 **18 時より忘年会**を予定しております。会員の皆様ぜひともご参集ください。

- ・日 時 2009 年 12 月 12 日(土) 15:30~17:30 (運営委員会は 14:00 から)
- ・会 場 立正大学大崎キャンパス 9 号館 (1 階 9B12 教室)

大崎駅・五反田駅から徒歩 5 分、大崎広小路駅から徒歩 1 分
(大崎駅/JR 山手線・湘南新宿ライン・埼京線・りんかい線)
(五反田駅/JR 山手線・都営地下鉄浅草線)
(大崎広小路駅/東急池上線)

山手通り沿い、大崎警察署の隣です。9 号館の場所は正面玄関の「インフォメーション」でお尋ねください。(お問い合わせは 090-4207-7376 釜崎まで)



【発表①】 スポーツと健康の関係についての一考察 河野清司(中京女子大学)

スポーツと健康の結びつきは当然のことであると考えられており、考察の対象外におかれることが多い。しかし、本当にスポーツは健康と結びつくのであろうか。

本報告では、現時点での生理学的根拠に基づくならば、スポーツと健康の結びつきを証明することは、実際には困難であるという点について考察していく。なぜならば、生理学がその根拠にしている「適度な運動」をはるかに超えているのがスポーツであり、競技者自身も健康を目指してプレーしているわけではないからである。それにもかかわらず、スポーツと健康の結びつきが語られてきたのは、なぜなのか。ここでは、先の考察に加え、この根拠について、生理学とは異なる原理的な視点から考察していく。

【発表②】 スポーツ科学の限界と可能性—科学論の視点から— 新保 淳(静岡大学)

本研究は、スポーツ科学論の展開を目指すことからスポーツ科学の限界を明らかにし、それを踏まえた上でこれからのスポーツ科学の可能性を考察した。

また方法としては、哲学の一分野である科学論(科学哲学)の視点から、科学を絶対視する科学観を相対化しつつ、その視点の必然性を考慮に入れながら「スポーツ科学」批判を展開した。

(各発表約 25 分、質疑約 25 分を予定)

忘年会のお知らせ

時 間 18:00～(予定)

場 所 五反田『とりさん』(東京都品川区西五反田 1-25-9 今田ビル)

電 話 03-3493-7781

連絡先 釜崎 太 kamasaki@ris.ac.jp 090-4207-7376

次号予告!

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太(立正大学: kamasaki@ris.ac.jp)までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第 13 巻第 3 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会

大橋道雄(会長)

編集者 阿部悟郎(広報委員長)

発行日 平成 21 年 11 月 12 日

連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18

仙台大学体育学部

0224-55-1147(直通)

アドレス: gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

本分科会も学会大会という大行事を成功裏に終え、年内行事は残すところ 12 月の定例研究会のみ。ひとえに会員の皆様のご協力の賜物です(会長談)。さて、きたる新年は寅年。干支の「寅」には、「虎」と「慎み」の意味があるとか。本専門分科会も、虎のように堂々と力強く歩みを進めつつも、常に慎みを忘れずにいたいものです。きたる寅年、会員の皆様にとって、よい年になりますように。(A 拝)

【追記】

編集事務局が以下の所に移りました。今後も、投稿等を宜しくお願いいたします。

新：編集事務局

深澤 浩洋 (FUKASAWA Koyo)

国立大学法人電気通信大学 人間コミュニケーション学科

〒182 - 8585 東京都調布市調布ヶ丘 1-5-1

Phone:042-443-5584/Fax:042-443-5590

e-mail : fukasawa@hc.uec.ac.jp